

# 書評

大塚 修

## 『普遍史の変貌』

(名古屋大学出版会、二〇一七年)

中川 灯里

本書は九世紀から一五世紀半ばにかけてのペルシア語文  
化圏におけるムスリム知識人の人類史認識について論じた  
研究書である。人々の間で歴史や記憶が形成・共有される  
ようになるまでの経緯を「普遍史」という歴史類型を用い、  
時代や王朝という枠を超えて包括的に描写する。

本書のキーワードとなる普遍史とは、一神教的世界認識  
を基盤として人類の歴史を叙述する歴史類型である。普遍  
史によって記される世界認識は当時の人々の世界観を反映  
しており、前近代における伝統的な宗教的世界観としてム  
スリムの間で広く共有されてきた。普遍史はこれまで画一  
的と評価されてきたが、実際にはそれぞれの著作に内容の  
同じものは一つとしてなく、著者の立場や学識により大き

な差異が存在する。本書では、旧約聖書に基づく一神教的  
世界認識、ゾロアスター教的世界認識、テュルク・モンゴ  
ル系世界認識の三つが混ざり合い、普遍史叙述が発展して  
いく過程を描き出す。

第一部では、フィルダウスィー以前の歴史書における古  
代ペルシア史叙述について論じている。史料の構成や情報  
源、古代史の扱いについて丁寧に検討することで、初期の  
アラビア語文献においては古代ペルシア史が旧約的普遍史  
の文脈に位置づけられており、またその位置づけを行った  
のはペルシア人ではなくアラブ人の側であったことを明ら  
かにする。一〇世紀半ば以降のイスラーム世界では、新た  
な情報源や歴史編纂の場が登場したことにより普遍史編纂  
は新たな局面を迎え、ハムザ・イスファハーニー『年代記』  
やフィルダウスィー『王書』など後の普遍史叙述に影響を  
及ぼす普遍史書が編まれた。様々な価値観と歴史叙述の相  
克と融合を経て、古代ペルシア四王朝の歴史は徐々に確立  
していったのである。

第二部においては、セルジューク朝期からイルハーン朝  
期にかけての古代ペルシア史叙述の変遷過程を辿ってい  
る。著者は、これまでイルハーン朝以降だと考えられてき  
た「イラン」概念の復活およびペルシア語普遍史の枠組み  
の成立は、セルジューク朝期には既にペルシア語文化圏に

浸透しており、逆にイルハーン朝期に編纂された普遍史書は、基本的にはそれまでの普遍史書の流れを汲んだ構成・内容であったとして、従来の研究への反証を行っている。また従来の研究ではあまり注目されてこなかったムスタウフイー『選史』に光を当て、この書の歴史叙述が後世の歴史家に与えた多大な影響を明らかにする。ムスタウフイーはイランの地を支配した諸王の歴史を旧約的系譜に位置づけ、王朝の起源をイスラーム以前に求めるという方法によって、旧約的普遍史、古代ペルシア史、オグズ伝承の三者の伝承を接合したのだ。

イルハーン朝末期からティムール朝初期にかけてのペルシア語文芸活動の保護・奨励と、ティムール朝宮廷における歴史編纂事業について論じた第三部では、普遍史編纂と政権との関係に焦点が当てられる。イルハーン朝衰退後の各地方政権においては、イランの地の王、イスラームの保護者、イルハーン朝の後継者の三点が強調され、支配の正当性を担保していた。

ティムール朝時代になると、ティムール朝はイランの地とトウランの地両方の支配者だという意識が確立し、オグズ伝承が普遍史叙述の上で重要な構成要素となる。加えてチングス・ハーンの血統自体に権威が付与されるようになり、旧約的普遍史、古代ペルシア史、オグズ伝承の三者が一体となった歴史叙述が可能となった。また前時代までの歴史

書の内容が整理・体系化されたことと、同時代の歴史認識を反映した歴史書が編纂されたことにより、ティムール朝期に古代ペルシア史叙述の典型の一つが成立する。ここに至りひとつの完成を見た普遍史叙述は、後世の歴史家、ひいては現代の研究者にまで大きな影響を及ぼしたのである。

終章において、ティムール朝において成立した普遍史上の人類史叙述は、古代ペルシア史、旧約的普遍史、オグズ伝承の三者が融合した「新しい」人類史だとまとめられる。普遍史という枠組みは、多様な民族・宗教・王朝を内包するペルシア語文化圏に、それら全ての歴史を叙述しうる場を与えたのだ。後の時代においても、基本的な構造は維持しつつも、その内容は時代・地域の要請、著者の関心に応じてさまざまに形を変えながら発展を遂げてきた。普遍史の広がりには、その叙述の豊富さと無関係ではなかったのである。

本書の意義は、研究の対象とする範囲が時代や王朝という枠組みを越えた包括的なものである点に特に求められよう。中でも使用されている文献の豊富さは特筆に値する。膨大な一次資料を精査する試みは著者の長年の研究の蓄積あつてのものである。独自に見出した写本を使用するなど広く史料を渉獵し、かつ丁寧な考察を行った著者の見識が、先行研究の限定的な枠組みへの鋭い指摘と普遍史研究への包括的なアプローチを可能にしたといえよう。

（早稲田大学大学院文学研究科）